

女たちの同時代 北米黒人女性作家選⑥

真夜中の鳥たち

メアリ・ヘレン・ワシントン編



女たちの同時代 北米黒人女性作家選⑥

真夜中の鳥たち

メアリ・ヘレン・ワシントン編

松岡和子

竹村美智子

高橋茅香子

藤本和子

矢川澄子

大社淑子

訳

真夜中の鳥たち

女たちの同時代 北米黒人女性作家選 6

松岡和子（まつおか かずこ）

東京医科歯科大教養部助教授。訳書『マイヤーズ』『絵画と文学』（白水社）『フレンチ』『背く女』（バシフィカ）他。

竹村美智子（たけむら みちこ）

法政大学卒業。訳書『メイル』『あかんぼ大作戦』（共訳、河出書房新社）他。

高橋茅香子（たかはし ちかこ）

朝日新聞社企画部勤務。訳書『ウォーカー』『メリディアン』（朝日新聞社）他。

藤本和子（ふじもと かずこ）

（女たちの同時代）編者。著書『砂漠の教室』（河出書房新社）、訳書『キングストン』『チャイナタウンの女武者』（晶文社）他。

矢川澄子（やがわ すみこ）

詩人。著書『静かな終末』（筑摩書房）、『反少女の灰皿』（新潮社）他。訳書『ギャリコ』『雪のひとひら』（新潮社）他。

大社淑子（おおくそ よしこ）

早稲田大学教授。訳書『モリスン』『鳥を連れてきた女』（早川書房）、同『青い眼がほしい』（朝日新聞社）他。

一九八二年九月三〇日 第一刷発行

定価——二五〇〇円

0097-234926-0042

編者——メアリ・ヘレン・ワシントン

訳者——松岡和子 他

発行者——初山有恒

印刷所——共同印刷株式会社

発行者——朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五―三―二 電話〇三（五四五）〇一三一
編集・図書編集室 販売・出版販売部 振替・東京〇一―七三〇
Printed in Japan

目次

真夜中の鳥たち

3

体験の存在空間 藤本和子

369

装幀 平野甲賀
カバー画 ナネット・カーター

女たちの同時代

北米黒人女性作家選

編者・藤本和子

真夜中の鳥たち

真夜中の鳥たち／目次

われら自身の歴史を求めて　メアリ・ヘレン・ワシントン（松岡和子訳）

7

ひとつづきの生命

アリス　ポーレット・チルドレス・ホワイト（竹村美智子訳）

29

イージプト・ブラウンストーンンの謎　アレクシス・デヴオー（松岡和子訳）

41

裏切り

鳥籠　ポーレット・チルドレス・ホワイト（竹村美智子訳）

60

ローレル　アリス・ウォーカー（高橋茅香子訳）

79

性の政治学

結末のないルナとアイダ・B・ウェルズ　アリス・ウォーカー（高橋茅香子訳）

98

ああ、きみは、なんてきれいなんだ　ヌトザケ・シャング（藤本和子訳）

126

容疑者はいつもきまって黒人の青年

ウィリー・リーへの鎮魂歌　フレンチ・ホッジス（松岡和子訳）

136

ヤクザなおじさん 忘れないわ アレクシス・デヴォー（松岡和子訳）

153

この野放図な聖女たち

精神病棟 ゲイル・ジョーンズ（矢川澄子訳）

182

ジエヴァータ ゲイル・ジョーンズ（矢川澄子訳）

188

もの思う女は怪物と眠る

エヴァ・ピース トニ・モリスン（大社淑子訳）

218

魔女鳥 トニ・ケイド・バンバラ（藤本和子訳）

238

自由の女をたたえて

歴史に関する瞑想録 シャーリー・アン・ウィリアムズ（松岡和子訳）

272

あたしはここをどかない

出発点 ヌトザケ・シャンゲ（藤本和子訳）

338

メドレー トニ・ケイド・バンバラ（藤本和子訳）

344

ボンチタのために

そうしたら、わたしたち飢えた真夜中の鳥たちに、朝の空を急降下する、そういう好機がくるかもしれない。

ポーレット・チルドレス・ホワイト

「鳥籠」

われら自身の歴史を求めて

『真夜中の鳥たち』は、『おおはんごん草』Black-Eyed Susansの出版（一九七五年）からちょうど四年半後に世に出たことになる。『おおはんごん草』も黒人女性作家のアンソロジーで、『ロサンゼルス・タイムズ』紙は「黒人女性の小説家たちが本領を発揮する背後に何があるか、その膨大な貯えのほんの一部を本書は垣間見させてくれる」と述べている。これは、苦痛と力の双方を自覚することから出発した本である。黒い肌の女たちは、自らの実生活や実体験について物語る時、さまざまのステロタイプを粉々に打ち砕く技倆があることを示してみせた。そして、その技倆なり力が（少なくともその端緒が）自身の経験を名づける能力だとすれば、『おおはんごん草』は、その力に向かって踏み出した最初の一步だったのである。というのは、この一冊は黒人女性の諸伝説を讃え、さまざまな夢を織り上げて神話にし、私たちはそのおかげで私たち自身の過去を回復し名づけられたからである。

これまでは白人の男たちがこの力を、世界の至るところで目につくこの力を常に保持してきたことを、一種の脚註として思い起こしてみるのも無駄ではあるまい。ありとあらゆる大都會には——私は特にワシントンとロンドンのことを考えているのだけれど——そういう男たちの記念碑が何百となくある。巨大なブロンズの胸像、威儀をただし長衣をまとった銅像、博物館に陳列されている記録文書や署名——そういったすべてが、自身を神話化し、歴史を作りなおし、自らを永遠に英雄的な姿に型取る男たちの歴史的な力を証拠立てている。女たちが生きていた痕跡はほとんど皆無である。私たちは歴史から抹消されてきたのだ。

『おおはんごん草』は、黒人の女たちを自らの歴史的経験の中心にしつかりと据え、自らを自らの生活のダイナミックな解釈者にした。この本は、評論家ホーテンス・スピラーズが常々私たちに果たすようにと言い続けてき

た仕事に手をつけた。即ち、「女たちは、自分自身の歴史的主題になろうとしなくてはならない。おいおいその本来の目的を、そして、本来の独自の表現を求めながら」³⁾。スピラーズが提起し、『おおはんごん草』が目指したのは、歴史の改訂以外の何ものでもなく、しかも、ただ単に過去を返せと要求するだけでなく、その過去を中心の場を返せと求めることである。書き記す言葉によって、私たちは私たち自身の儀式のために英雄的な型を彫り上げるだろう。過去にペンを執ってきたおよそすべての者によって、その像が制御され、ゆがめられてしまった女たち、かつて「この世の騾馬³⁾」⁴⁾と言ひ表された女たちが、自らのためにまっさらのイメージを選び出したのだ。それが、おおはんごん草になぞらえた黒い女たちの度胸のよさと快活さであり、謎めいた真夜中の鳥たちのあこがれと苛立ちなのである。

『おおはんごん草』もまた苦痛から出発した。ここに出てくる女たちの生は、孤立や喪失、傷つきやすさや犠牲などが特徴になっており、私たちは深い傷の痕を、その形をそらで覚えられるまで指でなぞらねばならないのだ。その「形」とは即ち、白い肌とまっすぐな長い髪をした美少女に変身するのを夢見る黒い女の子、南部の小作制度に圧しつぶされる子供、恵まれた白人の女性に比べて価値がないとされながらも、力強さの仮面をつけて自分を護ろうとする黒い女たち、女中として他人の家で寝泊りしてその日その日をしのいでゆくという生活のイメージ、そして、北部に移住しロマンティックな幻想を粉みじんにされる黒人女たち、などだ。『おおはんごん草』の中でも最も不朽のイメージのひとつは、トニ・モリスンが描いたポーリン・ブリードラヴ、黒く貧しく、前歯が一本欠けていて、なんとかジーン・ハーロウのようになりたいたと髪の毛の手入れをする少女である⁵⁾。

『おおはんごん草』における怒りは、声を奪われ、時として内向し、それをあからさまにやかましく表現したりわめいたりする口ぎたない女はひとりもない。自己規定への歩みもためらいがちである。強力なフェミニズムを標榜しても得るところはなく（同書におさめられた物語の大半は一九六〇年代かそれ以前に書かれている）、女性同士の間に力強い絆が生まれる可能性の意識はほとんどない。わずかに二篇の物語において、お互いに團結して手をさしのべあう女たちが描かれている。そして、和解のテーマが登場しても、それは女性と男性の間のも

のなのである。

「これは何よりもまず、犠牲になるのをこばむこと」⁽²⁾

『おおはんごん草』が黒人女性の在り方をちらりと垣間見させるものだったとすれば、『真夜中の鳥たち』はいわば広角レンズを使って、四方八方から黒人女性の生き方の全貌をとらえたものである。冒険に向かつてなお一層大きく開かれた、より誇り高く、気丈で挑戦的な、よりたくましいアンソロジー。ここには、女性を隷属状態に無理矢理おしこめようとする思想と態度に対する正面切った叛逆がある。黒人女性と白人女性の間の敵対は、白日のもとにさらされ、まともに存分に検討される。勝利の期待を抱き、果敢な理想を追求する雄々しい女たちがいる。描き、彫り、ペンを執る権利を奪われることを拒み、脳目もふらずにわざをみがこうとしている芸術家たちがいる。そして何よりも、ものごとが何かしら変わるまでは梃子でも動かないとやかましく騒ぎ立てる女たちがいるのだ。ポーレット・チルドレス・ホワイトの物語「鳥籠」の語り手は、このアンソロジーが目指すところを的確に言い表している。即ち、「わたしは、画を描いただろう。わたし自身を描いただろう。大きなキャンバスに、わたしの魂の歌を描いただろう。わたし自身の真理を探し求めて」。

『真夜中の鳥たち』はあるひとつの伝統を担いつづけている。というのは『おおはんごん草』にも見られたように、黒人女性の小説にははつきりとした独特なパターンがあるからだ。まず、黒人女性が、一貫して黒人女性の雄々しいイメージを描きつづけてきたことが独特である。無論それは、冒険にのりだして敵を征服する雄々しい英雄ではなく、たとえばゾラ・ハーストンが描くジュニー・クロフォードであり、ネラ・ラーセンのヘルガ・クレイン、アン・ペトリのルティ・ジョンソン、グウェンドリン・ブルックスのモード・マーサ、ポール・マシヤルのリーナ、アリス・ウォーカーのメリディアン、トニ・モリスンのスーラといった女性たちなのだ。これらは、社会が無理矢理押しつけようとするアイデンティティよりも、もっと大きなアイデンティティを作り出す

うと悪戦苦闘する女性たちである。彼女たちには自覚があり、意識があり、他ならぬその意識にこそ力がある。自分たち自身の真実を探り出そうとしながら、彼女らは叛逆し、危険を冒し、そして、男による定義からはみ出す。

彼女たち以外のどんな作家も、これまでは黒人女性がこの種の雄々しい力を身につけることを許さなかった。

黒人男性が書いたものの中では、女はまず例外なく男に従属している。女性たちは往々にして家庭的な役割に迫りやられ、一方男性は人生における「もつと大きな」問題にかかわるのである。大人になろうとする黒人男性の努力は常に最も高い尊敬の念をかき立てるのだが、黒人の女性がそれと同じように必死で努力をしても、ほとんど認められない。ただし、書き手が黒人女性の場合は別である。評論家ロバート・ステプターがいみじくも言った「今日のアフリカ系アメリカ小説における女性の声の高まりは、恐らく、初期の現代小説における狭い限られた黒人女性の描き方に直接関係している」という指摘は当たっている。

『真夜中の鳥たち』を読めば明らかとなり、黒人女性には、自らの生き方を記録するための独自の言語、独自の象徴、独自のイメージを探し求めている。そして、彼女たちは確かにアフリカ系アメリカ人の伝統と、女性作家のフェミニズムの伝統の中にしかるべき地位を求めることが出来るのだが、それと同時に明らかなのは、黒人女性が自由を目指してまず自分自身の名前と自分自身の場を主張しようとしていることである。

「ひとつづきの生命」

『真夜中の鳥たち』はまず「アリス」から始まる。これは、ある女がもうひとりの女に向かって手を差しのべ、心の触れ合いを求める物語である。この物語は、女性の文学における重要な主題のひとつ、即ち、「女同士の和解」をはつきりと打ち出している。「アリス」の主人公の主婦は、アリスの激烈な力強さ、温かい笑い、「いかす女」のおしやべりなどに培われて大人になったことを悟り、旧友アリスのもとに戻る。また、これと同じ理由

で、ポーレット・ホワイトの二つ目の物語「鳥籠」に登場する若い主婦である語り手は、黒人の女たちのサークルに加わるのだが、そこで女たちは女として成長する経験を儀式化し、主人公に女であることの秘密と恐怖の手ほどきをする。

お互いのつながりを改めて結びなおさねばならないという女たちの強い気持は、トニ・モリスンの『スーラ*』の中に力強く描き出されている。スーラは、独立独歩の生き方と冒険とを求めて家を出、一方友だちのネルは、昔から連綿と続いてきている家庭生活に入ることを選ぶ。最終的に彼女たちは再会し、旧交を温め、二人は「二つの喉とひとつの目。そしてどんなことがあってもお互いの足は引つ張らない」というほど近くなる。二人の女性の間の関係を探究しようという努力について、モリスンは次のように述べている。

「私たちは、お互い相手のためにすんで生命を投げ出そうとするアジャクスとアキレスの物語は読むけれど、女同士の友情について、また、お互いに尊重し合う女たちについて読むことは滅多にない。まるでそれが今までになかった何か新しいものだというふうである。だが、黒人の女たちは常にそういうものを持っていたし、常にお互いに感情や精神の面で支え合ってきたのだ。

私が『スーラ』という作品の中で言おうとしたのはまさにそういうことで、ネルは、長い年月の間彼女が会えずに淋しいと思い、会いたいと思ってきたのは夫ではなく、友だちのスーラだったと気づくのである。なぜなら、相手が叔母であれ姉や妹であれ友人であれ、語りかけられる女、本気になって話ができる女性が身近にいないということは、それこそ本当の孤独だからだ。これほど惨めなことはない。そして、男性もまた同じく身近に親しい男たちがいるのを必要とするのである」

黒人の女性たちが和解を求めるというテーマの最も名高い、また最も物議をかもした例は、ヌトザケ・シャングの舞踏詩『死ぬことを考えた黒い女たちのために*』の最終幕だろう。「そっと置かれる手」と呼ばれる場面で、

七人の女たち全員が登場し、腕をからませ合い、繰り返し低く歌う——「あたしはあたしの中に神を見つけて、あたしはあたしを激しく愛した」。シャンゲの劇において、和解は究極的にそして完全に、女性的で女性解放的な行為になるのだ。

女たちの間の連帯を実に単純明快にてらいなく扱った例は、トニ・ケイド・バンバーラの物語に見られる。バンバーラは女たちの中の気楽な仲間意識を示す場面を全くさりげない調子で随所に入れてみせる。「ジョンソンの娘たち」は、初期の作品集『私の愛しいゴリラ』に収められた物語だが、そこに出てくる四人の娘たちは、それぞれがつき合っている男たちの相対的な長所を比較評価し、自分たちが彼らをものにしたい秘訣を教え合う。しかも自分たちの性生活に対して大きな決定力を持っているので、女は受動的であるという観念はほとんど全く内容のないものになってしまう。彼女らが一番年若い娘に伝えるのは、冷めた平穏な自信であり、それはその娘が女として大きく飛躍しようとする時、「ああいった苦しみや下らないこと」を経験せずにすむようにという心づかいである。本書に収められている二つの物語、「メドレー」と「魔女島」においてバンバーラは、黒人女性の相互関係の伝統的な一面として、同じような種類のことがらである、女同士が養育み合う様を描いている。バンバーラは、彼女自身が生きてきたうえでこの共同体的なネットワークの一部だった女たちに信頼をよせ、男性や「美化」などについての忠告を与える。彼女の芸術と生き方に重大な影響を及ぼしたもののなかから。

「当時の美容院は、恐らく、私たちにとって唯一の女の学校であった——若い娘たちが成人に達し、女が大人になるというのが何を意味するかについて何らかの自覚を高められた場合は、他でもない、美容院だったのである。ものを書くうえで最大の影響力をもっていたのは、そこで会った女たちであった」。

和解とは普通、他者との調和協調の回復を暗示するものだが、もっと深いレベルでは、自分自身との一致、ないしは矛盾のない状態に達することも意味し得る。自分自身との一致を確立するということは、即ち、幾重にも

押しつけられた拘束の下で真の自己を取り戻すことでもあるのだ。また、自分がどれほど他の女たちと似通っているか、成長しつづけるにはどれほど彼女たちが必要か、そして、そういう絆を大切にすることがどれほど素晴らしいことか、などを認めることなのである。この和解の行為には、私たちがこれまで共有してきた共通の世界に対する尊重も含まれる。それは、ひとつの伝統に不可欠なあの要素、つまり、「私たちより前に現れた勇敢で想像力に富んだ女たちとの対話」なのである。

「もの思う女は怪物と眠る」

このアンソロジーに収められた恋愛小説は、それらが出す答えよりも多くの問いを投げかける。だが、その問いかけの性質から、黒人女性によって書かれた恋愛は決して女性の力の屈服の上に成り立っているのではないということが分かってくる。その点、往々にして男性が書いた小説に出てくる恋愛とは趣きを異にしている。それは、女が男とかかわってきた古いやり方に対する問いかけであり、また挑戦でもある。女性はその真の力、主体性やユーモアや知性などの故に尊ばれることがあり得るのだろうか？ あるいは、昔から男たちが慣例としてきたこと——たとえば、通りすがりの女に目をつけて声をかけるとか、肉体的な力を使使するとか、女は男の所有物だという意識（黒人のティーンエイジャーたちは、あいつのおんレディとかあいつのものビーストといった言い方をする）——は、不変不動のパターンなのか？ 芸術家として勝利をおさめた女性、何か英雄的で並はずれた地位についた女性、また、自分の仕事に熱心に打ちこんでいる女性は、最終的には常に、男と離れてひとりにならざるをえないのか？（詩人のキャロライン・カイザーはこのことを「あなたは才能だけを道づれに、流れをひとりさかのぼって行くのか？」と表現している。）真の意味で自由な女を愛せる男はいないのだろうか？ あるいは、あまりに大胆な影を投げかける女は、恋愛関係において和解しようのない対立を生み出してしまふのか？

『真夜中の鳥たち』のうちの五篇の物語は、まず第一に男と女の愛に関するものだ。一篇（「ジェヴァータ」）を

除く他のすべてがはつきりと主張しているのは、かりに恋愛が女性の力の屈服の上に成り立っており、それが自分自身の生き方に対する自身の権限を危険にさらすものならば、そういう恋愛は受け入れ難いということである。パンバーラの「メドレー」の中で、女主人公のスイートピーは、恋人が「おとなの女とつき合う用意ができていな」かったので、彼のもとを去る。ストザケ・シャンゲの物語に出てくる女性には、「ああ、きみは、なんてきれいなんだ」という男からのにせものの甘い言葉を、「世界的に愛されない黒人の女」が長らくこうむってきた搾取として用心深くしりぞけようとする。シャンゲの「出発点」の主人公マンディは、自分の自立に、少なくともエズラに対する愛情と同程度に高い価値を置き、「夜半に自分がたてる音の静寂」を聞き、「自分の世界でひとり目覚めます」ことを大切に思うようになる。

黒人女性の書いた恋愛小説も、そこに内包されるジレンマも、暗い運命や絶望を予想させるものとみなしてはならない。これらの物語の大半に出てくる男女は、お互いに愛し合い共に暮らす道を見つけるのである。もっとも、彼らは欠点だらけで、さまざまな難問をはらんでおり、およそハリウッド映画的なハッピー・エンドからは遠いけれども。ここにまとめられた男女間の愛情問題よりもっと大きな意味があるのは、十五篇のうち十篇の物語においては、ロマンティックな恋愛が中心的な問題になっていないという点である。即ち、愛されるというのは、アイデンティティの探究においてはそれほどさし迫った事柄とは見なされていないということだ。スピラーズの言葉を借りれば、「男性の不在、あるいは親密な関係の不確かさは、女が生きてゆくうえで特に主要な点ではなく、相互にからみ合った人生の諸問題の一面面なのである」。ここに描かれている女たちは男をつかまえるようにしたりはしない。彼女たちは、今世紀の小さな黒い少女たちには禁じられていた自由と勝利に対する権利を主張し、その過程で十分に成長し、自分自身の頭の中から飛び出すのである。